

名古屋大学医学部・医学系研究科外部評価委員会

—外部評価書（学部教育）—

岐阜大学大学院医学系研究科 教授
清 島 満

1 総合評価

名古屋大学医学部では推薦、前期、後期、3年次編入の4種類の選抜法が採られており、それぞれのアドミッションポリシーに沿った多様性のある人材の確保に努めている。全体として研究者育成に力点を置いたカリキュラム構成となっており、特に編入学生に対しては基礎医学系研究室に配属して継続的に研究に従事させて研究志向を高めている。これを実施する教員サイドの負担はかなりのものと推測されるが、全教員が一丸となって取り組んでいる様子がうかがわれる。研究者育成だけでなく、地域医療教育や海外研修にも力を入れており、それぞれに優れたプログラムが用意されている。これらの取り組みはまだ年数が経過していないため、その評価は将来に委ねなければならないが、十分に期待される場所である。

2 個別の項目に関する評価

(1) 医学部の教育目的と基本方針

名古屋大学医学部は名古屋大学学術憲章に則って「研究による世界的な成果を産生」および「論理的思考力と想像力に富んだ知の人の育成」を教育目的とし、それを実現するための基本方針として種々具体的な取り組みを定めている。

(2) 入試選抜体制

名古屋大学医学部は4つの方法で選抜しており、多様な人材の確保を目的としている。今後、各選抜法で入学した学生の成績や卒後の進路状況などをみて、選抜方法そのものや各定員数などを適切な時期に見直すことも必要であろう。25年度前期入試の志願者減少（4.1倍から2.3倍）には面接導入が影響していると考えられるが、これで名古屋大学医学部は全ての選抜法で面接を施行していることになり、教員の負担は大きいと望ましいことと評価する。

(3) 教育の実施体制

学部教育委員会の下に基礎医学セミナーを担当するWGやその他各種WGが組織されている。また、卒前卒後のシームレスな臨床教育を目的として総合医学教育センターが設置されている。ここに開設されたスキルス&ラボラトリーには多種多様のシミュレータが整備されており、学生および研修医の自習の場として活用されていることを確認した。

(4) 教育内容

名古屋大学医学部の一つの大きな特徴として3年次後期全期間に学生を基礎医学系・社会医学系講座に配属させ、研究活動を体験させていることがあげられる。このような研究室配属は他大学でも行われているが、その期間が半年という長期に及ぶことはない。その他、基礎医学セミナー、学生研究会があり、将来の優れた医学研究者の養成に力点を置いている。ただ、3年次編入者に対しては夏季休暇などを利用せざるを得ない非常

にタイトなカリキュラムとなっている。そのため、編入学年の前倒しを検討したこともあったようであるが、学生自身からは3年次編入でないと意味がない（すなわち受験していない）ということである。そのほか海外提携校での臨床実習にも力を入れており、国内にとどまらないグローバルな医師育成を目指している。

(5) 教育方法

各教員が割り当てられた学生を2名程度1年生から持ち上がりで担当する方式は学生にとって相談しやすい面もあるが、相性の面でそうでないケースも考えられるので、適宜学生へのアンケートなどで状況を確認しておく必要がある。授業形態については医学研究者育成を重点に置きつつ、臨床実習では屋根瓦式教育体制で学生の意欲をうまく引き出している。その他図書館の深夜・早朝開放で学生の利用度も高く、学習環境が充実していると言える。ここには開学当初からの歴史的な資料が展示されており、学生が名古屋大学医学部の歴史の重みを体感できる場所となっている。

(6) 学業の成果

4年生の時の進級条件はPBL テュートリアルなどの単位修得のほかにCBT、OSCEの合格がある。平成26年度より、CBT、OSCEに合格した学生に対してstudent doctorの称号を与えることが全国医学部長・病院長会議で決められ、「白衣式」などの名称でセレモニーを行う大学が増えている。臨床実習に臨むに当たって教員からの講話があり、学生達からは医師という職業を改めて考えるいい機会になると好評のようなので、実施に向けての検討の価値はある。

(7) 進路の状況

名古屋大学では平成16年の新臨床研修制度が始まる以前から卒業後直ちに中部地区の中核病院で研修するシステムが確立していたため、他大学ほど院内研修医不足の影響を受けていないようである。一方、研究者養成の取り組みの成果として基礎系大学院の進学者増加の兆しがみられるのは喜ばしいが、正確な評価にはもう少し年数が必要であろう。

(8) 将来への展望

最近の取り組みとして4大学（名大、東大、京大、阪大）リトリートと東海6大学リトリートがあり、学生の研究マインド養成を目指しているが、その効果を評価するにはまだ時間が必要である。また、地域医療に従事する医師養成に関しては後期入試で確保しているが、卒業時にドロップアウトを出さない指導體制とキャリアパスについて愛知県、医師会、関連病院との綿密な話し合いが必要である。海外実習支援については20年以上の実績があり、今後さらに提携校を増やされることを望む。

(所 属) 岐阜大学大学院医学系研究科 病態情報解析医学

(氏 名) 清 島 浩